

# 『保育所保育指針解説』における遊びに関する言説の分析

## Discourse Analysis about Play/Playing in “Guidelines for Nursery at Day Cares”

児 玉 理 紗・楠 本 恭 之

KODAMA Risa and KUSUMOTO Kyoji

キーワード：保育所保育・言説分析・遊び・保育原理・教育課程論

### 1 本研究の目的

本研究は、保育所保育指針（以下、指針）及びその解説（以下、断らない限り厚生労働省作成の保育所保育指針解説の意）を対象として、「遊び」に関する言説を抽出して分析するものである。

指針において保育の方法として「乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」が挙げられており、保育所における保育は、生活や遊びを通して総合的に行われるとしている。

これまでの遊び論の研究では、教育学的に遊びの意義付けを行ってきたものや、歴史学や民俗学、文化人類学的研究など遊びの実態を捉えようとした研究などがあるが、その系譜において遊びの定義付けが試みられている。そこでは、遊びは本来自由で、子どもの自発的な活動であるとされている。

本研究は、これまでの遊び論の展開や遊びの定義を参照しながら、指針及び解説における遊びに関する言説を分析し、指針及び解説の遊びの捉え方を見ることを目的とする。また本研究は児玉・楠本（2022）から続く一連の研究であり、幼稚園教育要領解説においても同様の分析を行ってきた<sup>1)</sup>。それらの結果と比較しながら検討していくこととする。

なお1, 2, 5については共同で執筆を行い、3と4-4は楠本が、4-1から4-3を児玉が執筆した。

### 2 分析の対象と方法

2017（平成29）年告示の現行指針及びその解説を分析の対象とする。指針は、厚生労働省告示として法的拘束力を有するとされ、保育所及びその保育士等は指針に従って保育することが求められる。なお指針は、第1章総則・第2章保育の内容・第3章健康及び安全、第4章子育て支援、第5章職員の資質向上、の5章構成である。

解説は、「保育所保育指針の記載事項の解説や補足説明、保育を行う上での留意点、取組の参考となる関連事項等を示したもの」であり、先ほど示した指針の5つの章に加えて、冒頭に序章、末尾に付録がある。分析に当たっては『保育所保育指針解説』（フレーベル館、2018年）を参照し、序章及び付録は分析の対象から外した。

遊びに関する記述には、名詞としての「遊び」とその応用形である「ごっこ遊び」などや、動詞としての「遊ぶ」とその活用形、また、「遊具」などの熟語などがある。そこで、指針及び解説において「遊」を検索する。それをパターンによって分類し、その共通性や付随する語について分析する。なお、抽出する際は、その後を含む一文を1つのまとまりとして扱う。であるから、1つの文に2つ以上の「遊」が含まれることもある。また、「遊」が含まれる一文だけでは、その意味が把握できにくいケースは、その1つ前の文を含めて抽出する。

その上で、解説における遊び事例の抽出を行なった。ここで言う遊び事例とは、例えば「ある子どもが保育士等のそばで輪投げの輪をなめて遊んでいたが、その輪がはずみで手から離れて転がり出す。輪が止まって倒れると、子どもはそれをめがけてはって行き、手に取って今度は床に打ち付けたり、『あーあー』と声をあげながら振り回したりしている。保育士等が『面白いものを見つけたね』と声をかけ、輪に向かって子どもがはっていくのに合わせて『まてまて』と後に続いて、一緒に遊び出す。」(98頁)などと子どもが遊んでいる状況について描写されている記述のことである。先述したように、遊びは本来自由で自発的な活動であることを踏まえると、遊びは活動の主体である子どもの内面と不可分のものである。したがって、解説における遊びにおいて子どもの内面が描かれているものについて抽出した。

また遊び事例のなかでも、子どもが遊んでいる状況が具体的に描写されているものから、具体的な遊びの描写はないものの、例えば「子どもは、身近な人やものなどあらゆる環境からの刺激を受け、経験の中で様々なことを感じたり、新たな気付きを得たりする。そして、充実感や満足感を味わうことで、好奇心や自分から関わろうとする意欲をもってより主体的に環境と関わるようになる。」(15頁)のように抽象的に描かれているものがある。そこで抽出した遊び事例を抽象・具体レベルで3つに分類し、子どもが遊んでいる状況が具体的に描写されているものをレベル3、詳しい遊びの様子についての描写は少ないものの遊んでいる状況が見えるものについてはレベル2、具体的な遊びの描写はないが、遊びの事例が描かれているものについてはレベル1とした。

さらに、解説には「例えば、夕方になって徐々に人数の少なくなりつつある時間帯には、家庭的な雰囲気の中で保育士等や友達と少人数で過ごすことができる場所を設けるなどして、子どもが自然と落ち着いて遊ぶことができるようにしたり、暑い時期に思う存分水遊びを楽しんだ後、ゆったり過ごすようにしたりすることなどが考えられる。」(46頁)のように、子どもの生活場面においても遊びと捉えられる箇所があり「生活のなかの遊び」として抽出を行った。

これらの遊び事例の抽出方法は児玉・楠本(2022)による幼稚園教育要領解説の分析<sup>2)</sup>と同様の方法を採用しており、また抽出した遊び事例は共同執筆者間で検討を重ね、可能な限り抽出の妥当性を担保した。

### 3 指針及び解説における「遊」の分析

#### 3-1 3歳未満児の保育の「ねらい及び内容」における「遊」の分析

指針において、第1章4箇所、第2章44箇所、第3章3箇所の計51箇所で「遊」を含む文が抽出された。なお、第4、5章にはなかった。

第1章では「保育の方法」として「生活や遊びを通して総合的に保育すること」を挙げている。第3章には「生活と遊びの中で」「食べることを楽しむ」という説明がある。先の事例と合わせて、児玉・楠本(2022)<sup>3)</sup>が指摘している「生活」と「遊び」の対比が指針でも確認できる。後段で、その2語を含む用例について分析する。第3章では先の例のほかに、事故防止について述べる際に、「重大事故が発生しやすい」活動として「水遊び」を挙げるとともに、「安全環境の整備」として「遊具等の配置」を適切に行うことを挙げている。

44箇所で「遊」が使われている第2章は、前文・第1節乳児保育に関わるねらい及び内容・第2節1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容・第3節3歳以上児の保育に関わるねらい及び内容・第4節保育の実施に関して留意すべき事項、で構成されている。第1、2、3節は、(1)基本的事項・(2)ねらい及び内容・(3)保育の実施に関わる配慮事項、の3項目で成り立つ。第2章第3節の「ねらい及び内容」は、幼稚園教育要領「第2章ねらい及び内容」とほぼ同じである。

第1節では乳児保育における「ねらい及び内容」を、身体的発達に関する「健やかに伸び伸びと育つ」、社会的発達に関する「身近な人と気持ちが通じ合う」、精神的発達に関する「身近なものに関わり感性が育つ」の3つにまとめて示しており、それぞれ、ねらい・内容・内容の取扱い、に分けて記述されている。「遊」は「ねらい」に用いられていない。「内容」には表1に示す4箇所で見出される。

表1 乳児保育の内容における「遊」

ア健やかに伸び伸びと育つ	なし
イ身近な人と気持ちが通じ合う	③生活や遊 <b>び</b> の中で、自分の身近な人の存在に気付き、親しみの気持ちを表す。
ウ身近なものに関わり感性が育つ	②生活や遊 <b>び</b> の中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。
	④玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊 <b>ぶ</b> 。
	⑤保育士等のあやし遊 <b>び</b> に機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。

先にも触れた「生活や遊びの中で」は、保育所で過ごす時間の全体を指すと考えられ、遊ぶ姿の具体をイメージした語ではない。精神的発達に関する内容として、「手や指を使って遊ぶ」姿と、保育士による「あやし遊び」が示されている<sup>4)</sup>。

つぎに、第2節を見てみる。1, 2歳児の保育については、幼稚園や3歳以上児と同じく「ねらい及び内容」が5領域として示されている。「ねらい」に「遊」を含む事例は、領域言葉「①言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる」と領域表現「③生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる」の2例がある。「内容」には、表2に示す11箇所で見出される。

表2 1, 2歳児の保育の内容における「遊」

健康	②食事や午睡、遊 <b>び</b> と休息など、保育所における生活のリズムが形成される。
	③走る、跳ぶ、登る、押す、引っ張るなど全身を使う遊 <b>び</b> を楽しむ。
人間関係	③身の回りに様々な人がいることに気付き、徐々に他の子どもと関わりをもって遊 <b>ぶ</b> 。
	⑥生活や遊 <b>び</b> の中で、年長児や保育士等の真似をしたり、ごっこ遊 <b>び</b> を楽しんだりする。
環境	②玩具、絵本、遊 <b>具</b> などに興味をもち、それらを使った遊 <b>び</b> を楽しむ。
言葉	④絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊 <b>ぶ</b> 。
	⑤保育士等とごっこ遊 <b>び</b> をする中で、言葉のやり取りを楽しむ。
	⑥保育士等を仲立ちとして、生活や遊 <b>び</b> の中で友達との言葉のやり取りを楽しむ。
表現	④歌を歌ったり、簡単な手遊 <b>び</b> や全身を使う遊 <b>び</b> を楽しんだりする。
	⑤保育士等からの話や、生活や遊 <b>び</b> の中での出来事を通して、イメージを豊かにする。
	⑥生活や遊 <b>び</b> の中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。

幼稚園教育要領では、領域言葉の「内容」に「遊」が用いられていなかったが<sup>5)</sup>、1, 2歳児の保育の「内容」では3つの項目で用いられている。また、「ごっこ遊び」が人間関係と言葉の2領域で使われている。「ごっこ遊び」は3歳以上児の「ねらい及び内容」では言及されないが、解説には6箇所で見出されており、「ごっこ遊び」が3歳未満児の遊びとされているわけではない。

### 3-2 「○○遊び」の分析

指針では、以下の「○○遊び」が扱われている。乳児保育では「あやし遊び」(115頁)のみ、1,

2歳児の保育では「ごっこ遊び」(141頁他2箇所)「言葉遊び」(156頁)「手遊び」(173頁)の3種、3歳以上児の保育では「言葉遊び」(263頁)のみとなっている。その他、第3章において事故防止について述べる際に「水遊び」(319頁)を挙げている。

解説では、第1章で「水遊び」(46頁)「運動遊び」(65頁、ただし「小学校の学習における」に続いて使用)「鬼遊び」(78頁)が見られる。第2章の乳児保育では、「象徴遊び」(113頁、ただし「その後の」に続いて使用)「あやし遊び」(115頁)が見られる。1,2歳児の保育では、「外遊び」(128頁)「ごっこ遊び」(141頁その他多数)「積み木遊び」(153頁)「手遊び」(173頁)が見られる。なお、「ごっこ遊び」は領域言葉の内容説明において8箇所で用いられている。3歳以上児の保育では、先述の「ごっこ遊び」の他に「鬼遊び」(196頁)「言葉遊び」(263頁)「手遊び」(263頁)が見られる。また、第3章では「子どもの発達を促す」「運動遊び」(301頁)、第4章では「親子遊び」(339頁)という用例も見られる。

「〇〇遊び」の用例について幼稚園教育要領解説と比較すると、幼稚園にあって保育所がないのが「泥遊び」「色水遊び」「乗り物遊び」「造形遊び」であり、そのうち「泥遊び」以外は、解説に該当する記述がない「第2章ねらい及び内容 第3節環境の構成と保育の展開」で例示されている。また、保育所にあって幼稚園にないのが「象徴遊び」「あやし遊び」「積み木遊び」であり、いずれも3歳未満児の保育における例示である。ただし、要領解説で積み木を用いて遊ぶ事例は8つ挙げられており、3歳以上児では「積み木遊び」が見られないとしているわけではない。

### 3-3 「遊び」と「生活」

つぎに、「遊び」と「生活」の語順について分析する。用例としては「生活や遊び」もしくは「遊びや生活」であり、まれに「生活と遊び」がある<sup>6)</sup>。指針では「生活や遊び」が7箇所、「遊びや生活」が3箇所ある。「生活や遊び」はすべて3歳未満児の保育を説明した部分で用いられており、3歳以上児では用いられない。「遊びや生活」のうち2箇所は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で出てきており、残りの1箇所「子どもの表現は、遊びや生活の様々な場面で表出されているものである」(176頁)が3歳未満児で唯一用いられているケースである。

つぎに、解説第2章の3歳未満児の記述と3歳以上児の記述別にみると、27箇所ある「生活や遊び」は3歳未満児でのみ、12箇所の「遊びや生活」は3歳以上児でのみ用いられている。このような偏りは、3歳未満／3歳以上児の保育所での姿に違いがあると考えられていることを示している。

### 3-4 動詞「遊ぶ」の分析

動詞「遊ぶ」に注目して3歳未満児と3歳以上児の記述を比較すると、以下のことがわかった。まず、3歳未満児には「遊び込む」が6箇所で用いられていたのに対して、3歳以上児では見られなかった<sup>7)</sup>。「遊び込む」の直前の語を見てみると、「集中して」「更に」「じっくりと」「安定して」「支えられて」「落ち着いて」となっている。単に「遊ぶ」でなく、「遊び込む」とするのは、「遊び込む」ことに価値を見出しているからであろう。

つぎに、動詞「遊ぶ」の直前の語について、両者で見られるのは「落ち着いて」「楽しく」「体を動かして」であり、3歳未満児のみであるのが「夢中になって」「夢中で」「伸び伸びと」で、3歳以上児のみであるのが「協同して」(5箇所)となっている<sup>8)</sup>。3歳未満児の遊びは主に保育士と子どもとの一対一で進み、3歳以上児では集団で「協同して遊ぶ」姿を想定しているといえる。



## 4 解説における遊び事例の分析

### 4-1 全体像

解説における遊び事例の分析を行ったところ、510の遊び事例が抽出された。抽出された遊び事例の数と項目は表3の通りである。

表3 遊び事例の数と項目

		生活	1	2	3	総事例数
第1章 総則	1 保育所保育に関する基本原則	0	9	0	0	9
	2 養護に関する基本的事項	2	4	0	0	6
	3 保育の計画及び評価	1	9	0	0	10
	4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項	2	33	9	11	55
第2章 保育の内容	1 乳児保育に関するねらい及び内容					
	(1) 基本的事項	0	0	5	0	5
	(2) ねらい及び内容 ア 身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」	4	5	2	2	13
	(2) ねらい及び内容 イ 社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」	2	4	12	2	20
	(2) ねらい及び内容 ウ 精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」	1	12	10	1	24
	(3) 保育の実施に関わる配慮事項	0	0	0	0	0
	2 1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容					
	(1) 基本的事項	0	1	3	0	4
	(2) ねらい及び内容 ア 心身の健康に関する領域「健康」	10	8	4	0	22
	(2) ねらい及び内容 イ 人との関わりに関する領域「人間関係」	2	14	5	0	21
	(2) ねらい及び内容 ウ 身近な環境との関わりに関する領域「環境」	2	8	11	4	25
	(2) ねらい及び内容 エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」	5	11	6	7	29
	(2) ねらい及び内容 オ 感性と表現に関する領域「表現」	2	8	12	6	28
	(3) 保育の実施に関わる配慮事項	0	3	0	0	3
	3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容					
	(1) 基本的事項	0	4	0	0	4
	(2) ねらい及び内容 ア 心身の健康に関する領域「健康」	10	27	6	0	43
	(2) ねらい及び内容 イ 人との関わりに関する領域「人間関係」	1	36	8	0	45
	(2) ねらい及び内容 ウ 身近な環境との関わりに関する領域「環境」	1	26	14	13	54
	(2) ねらい及び内容 エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」	2	16	16	3	37
(2) ねらい及び内容 オ 感性と表現に関する領域「表現」	0	22	13	2	37	
(3) 保育の実施に関わる配慮事項	0	0	0	0	0	
4 保育の実施に関して留意すべき事項	0	11	1	1	13	
第3章 健康及び 安全	1 子どもの健康支援	0	0	0	0	0
	2 食育の推進	2	0	0	0	2
	3 環境及び衛生管理並びに安全管理	0	0	0	0	0
	4 災害への備え	0	0	0	0	0
第4章 子育て支援	1 保育所における子育て支援に関する基本的事項	0	0	0	0	0
	2 保育所を利用している保護者に対する子育て支援	0	0	0	0	0
	3 地域の保護者等に対する子育て支援	0	1	0	0	1
第5章 職員の資質 向上	1 職員の資質向上に関する基本的事項	0	0	0	0	0
	2 施設長の責務	0	0	0	0	0
	3 職員の研修等	0	0	0	0	0
	4 研修の実施体制など	0	0	0	0	0
	計	49	272	137	52	510

遊び事例が多く抽出されたのは、「第1章第4節幼児教育を行う施設として共有すべき事項」と「第2章保育の内容」である。「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」は要領解説の第1章第2節「幼

稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』と共通した箇所であり、55例の遊び事例が抽出された。また、「保育の内容」では、各年齢区分の「(2)ねらい及び内容」に多くみられ、「乳児保育に関するねらい及び内容」では57事例、「1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容」では125事例、「3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」では、216事例抽出された。なお、「3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」の「(2)ねらい及び内容」は、要領解説の「第2章第2節各領域に示す事項」と共通した箇所である。第3～5章では遊び事例は少なく、3事例しか抽出されなかった。

また、抽象・具体レベル別では、抽象・具体レベル1が多く272例で、抽象・具体レベル3は52例と少なく、レベル3の遊び事例が多い箇所は、「1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容」の領域言葉と領域表現、「3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」の領域環境であった。

#### 4-2 生活のなかの遊び

生活のなかの遊び事例の総数は49例であり、要領解説に比べ多くの遊び事例が抽出された。要領解説の分析<sup>9)</sup>においても、「遊び」と「生活」の捉え方が曖昧で、生活場面における事例の中でも遊びと捉えられる事例が存在することがわかったが、本研究においても同様の結果が見出されたといえる。また、生活のなかの遊び事例の大半が領域健康に見られたことは要領解説と同様である。

さらに、内訳をみると「乳児保育に関するねらい及び内容」には7事例、「1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容」には21事例、「3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」には14事例見られたことから、3歳以上児の保育よりも3歳未満児の保育に関する「ねらい及び内容」に、多くの生活のなかの遊び事例が見られることがわかった。

例えば、「乳児保育に関するねらい及び内容」のア「身体的発達に関する視点」では、「例えば、ある子どもがテーブルに着いて、エプロンをつけてもらおうと、嬉しそうにテーブルを両手でバタバタと打ち、音を出して笑っている。それを見た別の子どもがにこにこしながら同じように音を出す。そこで保育士等が『食事の時間ですよ。一緒に食べようね、楽しいね。』と声をかけながら席に着き、『いただきます』と手を合わせると、子どもたちもそれに続いて手を合わせたり声を出したりしながら、それぞれに手やスプーンを使って食べようとする。保育士等は、一人一人に応じて食べやすいように手に持たせてあげたり、食が進まない子どもには食べさせてあげたりしている。初めて見る食品に手をつけようとしないうちに、保育士等が『おいしいよ』と声をかけると、子どもはそれを手にして眺めている。そこで保育士等に『おいしいから食べようよ』と再び励まされて、口に入れると、それにまた『おいしいね』と保育士等の声が添えられる。」(99頁)という事例がある。子どもたちの嬉しそうな様子や子どもが食事を楽しむことが出来るよう保育士等が励まし声をかける様子からは、食事という生活場面における事例であるが、子ども自身の自由で自発的な活動として描かれている。このように3歳未満児の保育の「ねらい及び内容」には食事や衣類の着脱、排泄、睡眠などの生活場面の記述が多いことから、要領解説と比べて多くの生活のなかの遊び事例が抽出されたのであろう。

#### 4-3 生活以外の遊び

抽象・具体レベル1～3の遊び事例のうち、ここではレベル3の遊び事例についての分析を行う。レベル3の遊び事例は52例あったが、ここでは要領解説における分析において抽出されたレベル3の遊び事例<sup>10)</sup>と共通する事例を除く22事例を分析対象とした。22の遊び事例は表4の通りである。なお遊び事例の下線や事例番号は筆者によるものである。

表4 抽象-具体レベル3の遊び事例

番号	頁	遊び
1	98	ある子どもが保育士等のそばで輪投げの輪をなめて遊んでいたが、その輪がはずみで手から離れて転がり出す。輪が止まって倒れると、子どもはそれをめがけてはって行き、手に取って今度は床に打ち付けたり、「あーあー」と声をあげながら振り回したりしている。①保育士等が「面白いもの見つけたね」と声をかけ、輪に向かって子どもがはって行くのに合わせて「まてまて」と後に続いて、一緒に遊び出す。
2	98	また他のある子どもは、低い柵の間から、玩具を柵の中に入れていた。次々と入れて周囲に玩具がなくなると、今度は手を伸ばせば届きそうなところに下がっている鈴をつかもうとするが、なかなか届かない。お尻を浮かせるようにして、何度も試みているうちに柵につかまり立ちをすることができ、鈴に手が届いたので、揺らして音を出している。その様子を見守っていた保育士等が、「立てたの」とか「いい音がするね」と喜んで声をかけると、子どもも嬉しそうに一緒に笑う。
3	108	例えば、ゆったりとした雰囲気の中で、子どもと保育士等が対面で絵本を開くと、子どもは犬の絵を指差し「ワンワン」と言葉を発する。保育士等がそれに応えて「ワンワンだね。しっぽをフリフリしているね。」と状況を丁寧に語ると、子どもは保育士等の顔を見上げて「フリフリ」と言う。保育士等はさらに、「フリフリしているね。ワンワン、嬉しいのかな。」と言葉を続ける。
4	109	また、こうした絵本を読んだ後散歩に出かけた時、犬に出会うと、子どもが「ワンワン」と指差すことがある。そこで保育士等が「ワンワンだね。絵本のワンワンと一緒にかな。」「しっぽ、フリフリしているかな」と実際の体験と絵本をつなぐ言葉をかけてみる。保育所に戻ると、子どもは先の絵本を手に取り、犬のページを開き喜々としてまた「ワンワン」と言う。
5	114	積み木などを見付けるとそれに手を伸ばし、次第に両手に持って打ち付けたりたたき合わせたりするようになる。
6	146	小さな音にも耳を澄ましたり、脆いものをそっと扱ったり、一方で思い切り木の枝を揺らして落ちてくる水滴の冷たさや感触を楽しんだり、体全体を使って環境に触れる経験を通して、子どもにとって身近な世界が魅力に満ちたものになっていく。
7	148	この時期の子どもは、手を巧みに使えるようになってくることで、例えば積み木を重ねて高くしたり、横に並べて四角く囲いを作ったりするなど、興味をもった玩具等を自分なりの目的や方法でいろいろと工夫しながら扱って楽しむ姿が見られる。さらに、成長に従ってそれらを塔に見立てたり、「ここが駅なの」と言いながら別の積み木を「電車が発します」と床の上で動かしたりと、イメージを用いた遊びも盛んになる。
8	149	また、こうした遊びの中で偶発的に思いがけない動きを発見すると、それを繰り返しながら、「こうするとどうなるだろう」「どうしたらうまくいこう」「どうしてこうなるんだろう」など、物の関係や仕組みについての探究心が芽生える。例えば、凹凸のあるブロックを重ねようとした瞬間に形が崩れ、上にのせようとしたブロックが転がり落ちていく様子に興味向き、意図的に重ねては崩すことを繰り返すことで、崩すこと自体の面白さに気付いたり、崩れないようにバランスをとる積み方を見付け出したりするようになる。
9	154	例えば、草花、小枝、実などを見付けて集めてみたり、アリの行列を見付けて忙しく動き回る姿をじっと見入ったりする。また、ダンゴムシに触ってみて、その瞬間的な形状の変化に驚くようなこともある。このように身近な生き物に対する「見たい、触りたい」という欲求から、更に「その生き物のことをもっと知りたい」という好奇心へと高まっていく。

10	161	例えば、「びよーん びよーん」と言いながらカエルの真似をして跳んだり、「三びきのこぶた」をイメージし子どもたちが子ブタになって逃げ出し、保育士等がオオカミになって追いかけてたりして、ごっこ遊びを楽しむこともある。このように、友達と一緒に絵本や紙芝居のイメージをもって、ごっこ遊びを共に楽しむ経験は、子ども同士の心を通い合わせることもつながる。
11	163	例えば、丸くなったダンゴムシを、数人でじっと見つめたり、手のひらにのせて保育士等に見せた後、違う友達にも見せたりするなど、同じ興味の対象を介して友達との関わりが広がる時期である。保育士等は「ダンゴムシさん、丸くなってるね。お昼寝しているのかな。」など、② <u>子どもの気持ちを代弁したり</u> 、更に③ <u>やり取りが引き出されるような応答をしたりして</u> 、④ <u>他の子どもとの仲立ちをすることが大切</u> である。そうすることで、子どもたちは言葉で思いをやり取りする喜びを経験する。
12	163	また、子どもたちは、友達と同じことをすることを喜び、互いの動きを模倣し合うことも楽しむようになる。「〇〇くんの電車が来るよ。ガタンゴトン、ガタンゴトン。」などと保育士等が言葉をかけることで、他の子どもたちも「ガタンゴトン、ガタンゴトン」と電車になり、皆で一緒に電車ごっこを楽しむこともある。このように、保育士等の言葉が、子どもの言葉を生み、遊びの楽しさを広げるのである。
13	166	「どうしたの?」「二人とも困ったね」と子どもたちの思いを察しつつ、それを聞き出しながら、物を取られた子どもに対しては「遊んでいたのを取られて、悲しかったね。まだ使いたかったよね。」と子どもの気持ちに共感し、「でも、〇〇ちゃんもこれが欲しいんだって」と相手の思いを伝える。物を取った子どもに対しても「楽しそうだったから、〇〇ちゃんも欲しくなったんだね」と共感し受け止めた後、「でも今は、△△ちゃんが使ってたんだって。急に取られて、悲しかったんだって。」と相手の思いを伝えたり、「貸してほしい時は『貸して』って言おうね」「急に取ったらびっくりして、悲しくなっちゃうんだよ」と、言葉で思いを伝えたりする大切さを知らせていくことが必要である。
14	167	「ワンワン」という一言にも「犬がいた」という事実だけではなく、「かわいい」「大きい」など、犬を見た時の子どもの思いや驚きが込められている。「ほんとだね。ワンワン、白い毛がふわふわしていて、かわいいね。」などと言葉を補いながら伝え、言葉をやり取りする喜びを感じられるようにすることが大切である。
15	167	また「コレ、ナーニ？」などと、盛んにももの名前を尋ねるようになる。言葉で周りの世界を捉え始めるのである。この時期、子どもと一緒に絵本を開けば、子どもが犬の絵を指差しながら「ワンワン」と言ったり、象の絵を指差しながら「コレ、ナーニ？」と尋ねたりする。「ワンワンだね。しっぽ、フリフリしているね。」「象さんだね。お鼻が長いね。」と、⑤ <u>子どもの言葉に、保育士等が丁寧に言葉を補いながら返す</u> ことで、子どもの言葉は豊かになり、言葉で捉える世界も広がる。
16	167	例えば、バスの運転手さんになるなど、現実の生活ではできないことをイメージの中で体験できるようなごっこ遊びを楽しむようになる。段ボール箱で作ったバスや、車掌さんの帽子など、イメージを支える小道具を準備し、保育士等も一緒に遊びに入り、「発車しまーす」「次は、ドングリ公園です」などとモデルになって、言葉のやり取りをして見せることで、子どももよりイメージをもちやすくなる。
17	172	赤く色付いた葉を拾って、「見て見て」と保育士等や友達のもとへ持ってくるなど、この時期の子どもは、感じ取ったことや心を動かされたことを、身近な人と一緒に楽しんだり、伝え合ったりするようになる。⑥ <u>「きれいね。真っ赤だね。」などと保育士等が子どもの発見や感動を受け止め、「どこで見付けたの？ 私も探してみよう。」と一緒に集めるなど、共感的に関わることで、子どもは喜びや自信を得て、もっとたくさん落ち葉を集めようとしていたり、他の場所でも違う形や色の葉を見付けようとしていたりする。</u>



18	175	保育室の一角で「ここはお風呂です」と保育士等に声をかけられると、髪や体を洗うような動作をしたり、人形やぬいぐるみに布をかけて優しく寝かしつけたりと、見立てやふりを保育士等と楽しむ。
19	175	また、クレヨンなどを手にして、思いのままに画用紙になぐりがきをして遊ぶこともある。最初のうちはクレヨンを握って手を動かすことや紙にその跡が残ること自体が面白い様子だが、やがてクレヨンの持ち方や手首の動かし方などに慣れてきて、かく時の筆圧が安定し線になめらかさが出てくる。この時期はかいた線や点がまとまった形にはなっておらず、何かを意図してかいたようには見えないが、後で「これは？」と聞くと「ママ」と答えたりすることもある。また、経験した出来事の思い出と結び付けて「べったん、べったん、おもちつき」とつぶやきながら点を打ったりする。子どもなりに、かくという行為やかいたものに、意味が伴い始めている姿といえる。
20	176	例えば、普段よく散歩に出かける近くの公園の桜は、いつも同じ場所にあって、季節の移ろいととも葉のない木、花が咲き乱れ散る木、若葉の木、色付く木、葉を落とす木と様々に変化する。そこで、子どもは花びらを追いかけ、どこからくるのかを探して、見上げた空の青さに気が付く。夏には、そよ風に揺れる葉の隙間から漏れる光の環を追いかけることに夢中になる。葉の散る頃は、「葉っぱの雪だー」と思わず声をあげたりする。落ち葉の上に寝転んで、カサコソという音を聞き、枯れた葉のにおいを嗅いで秋を感じる。
21	177	例えば、いつも遊んでいるブロックを自分も他の子がしているように つなげたいと試みるが、うまくいかない。それでも、飽きずにつなげようと試みているうちに、ブロックの引っ込んでいるところと、でっぱりのあるところを見付けて、そこにはめこもうとする。しかし、指先が思うように動かず、また何回も試みる。偶然にもブロックがつながると、次も同じように試行錯誤する。今度はすぐに引っ込みとでっぱりを見付け、うまくはまると、ようやく、引っ込みとでっばりの関係が分かり、保育士等のところへつなげたものを得意げに見せに来る。保育士等の「びったりはまったね。よかったね。」とこれまでの過程や子どもの喜びを認め、受け止める言葉に、子どもは更に意欲を得て、またブロックをつなぎ続ける。
22	179	水などのように、ある程度子どもの思うように自由に変化させることができ、時に想像を超えた動きをする物質は、子どもにとって思わぬ発見をもたらす遊びの素材である。例えば、水道で水を流して、そこに手を伸ばすと、手の位置で水のはね方が変化する。その水が、土を濡らして模様ができると、そこから連想して保育士等と一緒に様々な物語をつくっていく。また、光の当たり方で小さな虹ができたりすることを発見し、その美しさに見とれたり、友達に知らせたりする。

#### 4-3-1 子どもの遊び

分析の対象となった22の事例は全て「乳児保育に関するねらい及び内容」と「1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容」の「(2)ねらい及び内容」から抽出されたものであった。その22の事例のうち、複数の子どもが登場する事例は事例10-13, 16, 17, 22の7事例で、その他の15事例は登場する子どもは一人であった。要領解説の分析において同様に抽象・具体レベル3の遊び事例の分析を行ったが、その多くは複数の子どもが登場する事例であったことがわかっており<sup>11)</sup>、3歳以上児の遊びでは複数の子どもが遊ぶ様子、3歳未満児の遊びでは一人で遊ぶ子どもの様子が多く描かれていることがわかる。このことは、前節における分析でも見出された。

一人で遊ぶ子どもの事例には、輪投げの輪や積み木、ブロック、人形やぬいぐるみ、絵本、落ち葉や水、生き物等、まだ子ども同士の関わりが少ない3歳未満児がモノと関わり遊ぶ姿が見られる。具体的には、事例7のように、積み木を駅や電車に見立てて工夫しながらイメージをもって遊ぶ姿、事例8ではブロックの偶発的な動きから探求心が芽生え繰り返し遊ぶ姿、事例20では桜の木が季節のうつろいとともにもたらした変化に子どもが夢中になる姿が描かれている。このように子ども

が様々なモノと関わり自分なりに遊ぶ姿が描かれている。

複数の子どもで遊ぶ事例では、7事例中3事例（事例10, 12, 16）が電車ごっこやバスごっこなどのごっこ遊びが描かれ、いずれも領域言葉における事例であった。例えば、事例16では遊びの中で保育者がモデルとなり言葉のやり取りをして見せることで、子どもたちがイメージの中で遊びを広げる様子が描かれている。その他の事例では、落ち葉やダンゴムシ、水などを介して子どもたちがつながる様子が描かれている。

#### 4-3-2 遊びにおける保育士等の関わり

つぎに、遊びにおける保育士等の関わりについて確認する。22事例中保育士が出てくる事例は16事例と多く見られ、複数の子どもで遊ぶ事例にはすべての事例に保育士が関わっている。このことから3歳未満児の遊びでは保育士の役割が欠かせないものとされていることがわかる。

保育士等の関わりで多く見られるのが「一緒に」という言葉である。例えば、事例1では「保育士等が『面白いもの見付けたね』と声をかけ、輪に向かって子どもがはっていきのに合わせて『まてまて』と後に続いて、一緒に遊び出す。」（下線部①）、事例17では「『きれいね。真っ赤だね。』などと保育士等が子どもの発見や感動を受け止め、『どこで見付けたの？ 私も探してみよう。』と一緒に集めるなど、共感的に関わることで、子どもは喜びや自信を得て、もっとたくさん落ち葉を集めようとしたり、他の場所でも違う形や色の葉を見付けようとしたりする。」（下線部⑥）などである。3歳未満児の子どもへの関わりとして、「一緒に遊ぶ」ということが重視されていることがわかる。なお、同様に行った要領解説の分析では子どもと教師が「一緒に遊ぶ」という事例は1事例のみであった。

その他、保育士等の関わりとして見られるのは、「子どもの気持ちを代弁したり」（下線部②）、「やり取りが引き出されるような応答をしたり」（下線部③）、「他の子どもとの仲立ちする」（下線部④）、「子どもの言葉に、保育士等が丁寧に言葉を補い」（下線部⑤）等である。3歳未満児の保育士等の関わりとして、子どもの言葉を共感的に受け止め、丁寧に補い、子どもの気持ちを代弁し伝え、子ども同士の遊びをつなぐことが重要視されているのであろう。

要領解説の分析においては、「教師」という言葉が用いられている事例は16事例中6事例であり、それと比較しても3歳未満児の遊びにおいて保育士等の登場回数が多いが<sup>12)</sup>、共通して言えることは、教師や保育士等の主導性よりも、子どもの自発性に重点を置いていることである。保育士の関わりは、子どもの行為や発見を受け止め一緒に遊んだり、子ども同士の仲立ちとしての役割を担うものとして捉えられていることがわかった。

#### 4-4 遊び事例における物的環境

ここでは、遊びに関わる物的環境に注目し、遊び事例に挙げられている物的環境を抽出して分析する。遊び事例における物的環境は、以下の表のように12に分類できた。児玉・楠本（2022）<sup>13)</sup>における同様の分類から、自然物を具体と一般に分け、「部屋」「床・天井・壁」「衣類」を加えた。

表5 遊び事例に挙げられている物的環境

遊具	6種	輪, 鈴, 積み木, ブロック, 人形, ぬいぐるみ
固定遊具	0種	—
材料	4種	箱, 布, 段ボール箱, 画用紙
自然物・具体	4種	犬, アリ, ダンゴムシ, 桜
自然物・一般	11種	木, 泥, 木の枝, 水(滴), 花(花びら), 実, 砂, 土, 雨, 葉(落ち葉), 虫
道具	7種	スプーン, 石けん, カップ, コップ, 傘, 皿, クレヨン
視聴覚教材	2種	絵本, 紙芝居
校具	5種	柵, テーブル, エプロン, ロッカー, 椅子
周辺施設	1種	公園
部屋	5種	職員室, トイレ, テラス, 廊下, 階段
床・天井・壁	3種	床, 天井, 壁
衣類	4種	おむつ, 帽子, 靴, ボタン

出現が多いのは順に、絵本(14)、葉・靴(5)、土・水・花・床(4)、積み木・木・虫・テーブル・帽子(3)である。3歳以上児の保育で挙げられているものと比較すると、自然物が多く扱われている点が共通する。相違点として、遊具や道具、材料については、遊具や材料の種類が少なく、固定遊具は扱われていない。また、保育室において生活場面で用いる道具や校具が多く挙げられており、衣類にも言及がある。施設・設備では、「(輪を)手に取って今度は床に打ち付けたり」(98頁)といった例がある一方で、周辺施設の例は公園にとどまる<sup>14)</sup>。

## 5 まとめ

指針及び解説における「遊」の分析の結果、以下のことがわかった。一つに、「ごっこ遊び」は人間関係と言葉の2領域の「ねらい」に示されており、1, 2歳児の遊びとして重視されていることがわかった。二つに、「遊び」と「生活」の語順に関する分析から、3歳未満児の保育所での営みは「生活」に付随して「遊び」があり、3歳以上児の保育所での営みは「遊び」に付随して「生活」があると考えられていると推測された。三つに、動詞「遊び込む」が3歳未満児の保育だけに用いられていることについて、その前提として、一人で、あるいは保育士と一対一で「遊び込む」姿が想定されているのではないだろうか。遊び事例の分析においても、3歳未満児の「一人遊び」場面が多いことが指摘できる。

つぎに、解説における遊び事例の分析を行った結果、幼児教育を行う施設として共有すべき事項とねらい及び内容に具体的な遊び事例が多く使用されていることがわかった。また生活場面においても遊びと捉えられる事例があり、3歳未満児の保育のねらい及び内容に多く見られることから、「遊」の分析による考察と同様に3歳未満児の「遊び」が「生活」に付随して捉えられていることが示唆される。

さらに、3歳以上児の遊びでは複数の子どもが遊ぶ様子、3歳未満児の遊びでは一人で遊ぶ子どもの様子が多く描かれていることがわかった。また、3歳未満児の遊びには3歳以上児の遊びに比べ、保育士の関わりが多く見られることから、3歳未満児の遊びには保育士の存在が欠かせないものとして考えられていることがわかる。ただし、保育士の関わり方としてはいずれも、子どもの行為や発見を受け止め一緒に遊んだり、子ども同士の仲立ちとしての役割を担うものとして捉えられており、3歳以上児の遊びにおける教師の関わりと同様に子どもの自発性に重点が置かれていることが

わかった。最後に、遊びの物的環境について、床や廊下を含めて屋内にある物が多く挙がっており、3歳未満児の保育は屋内を中心に行われているイメージであることがわかる。

今後は、遊び概念の分析を進めるために、2008（平成20）年以前の要領・解説や『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』について同様の分析を行い、比較検討を行っていく。また、本研究では分析の対象としなかった、抽象度の高い抽象・具体レベル1及び2の遊び事例の分析も行う。

- 
- 1) 児玉理紗・楠本恭之「『幼稚園教育要領解説』における遊びに関する言説の分析」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第8巻，2022年，pp.144-153。
  - 2) 註1 掲出論文，pp.144-145。
  - 3) 註1 掲出論文，pp.145-146。
  - 4) 「あやし遊び」を CiNii Research で検索すると6件が該当し、最も新しいものが1996年であった。なお、2008年版の指針では用いられていない。
  - 5) 註1 掲出論文，p146。
  - 6) 指針で1箇所，解説で4箇所。
  - 7) ただし、「幼児期の終わりまでの育ってほしい姿」のなかに、複数の子どもの遊びにおいて動詞「遊び込む」を用いているケースが1箇所ある（71頁）。
  - 8) 「協同して遊ぶ」はパーテン（Parten, M. B.,1902-70）の遊びの発達段階説で用いられる「協同遊び」を想起させる。パーテンが説明に用いた用語のうち、「一人遊び」「平行遊び」「協同遊び」が2008年版指針で使用されているが、2017年版にはいずれも見られなくなった。今後、旧指針や要領との比較の視点となるだろう。
  - 9) 註1 掲出論文，p148。
  - 10) 註1 掲出論文，pp.148-151。
  - 11) 註1 掲出論文，p151。
  - 12) 註1 掲出論文，p152。
  - 13) 註1 掲出論文，p152。
  - 14) 要領解説では、宿泊施設、広場、高齢者福祉施設、図書館が扱われている（註1 掲出論文，p152）